

一、鼠取り

人間の喜怒哀楽の感情も生理的なものとみえて終日あまり激しい労働を続けると、横ツ面の一つ位張り飛ばされてもなんだかぼうつとしていて急には腹も立たないようなことがよくあるものである。弥助爺さんの晩年の状態が丁度そんな風なものだった。

男手一つで目の中に入れても痛くないようにしてやっとな一人前に育ててやった息子に、毎日のように口穢く罵られ、時には足蹴にされるようなことがあっても、怒るということを壮年時代の何処かの隅に置き忘れて来た弥助爺さんは反抗的な態度一つ見せなかった。それどころか、もう二十年幾年も前のこと、まだ今の息子が四ツか五ツの頃、昼寝の気持ち悪さか何かから聞き分けもなくむずかっているのをあやしてやっていた時のような人の好い困り方で、自分の前に立ちただかっている狂暴な息子の顔を見ながら、他愛もなく

「危いじゃないか。危いじゃないか」と頭を抱えて逃げ廻っているような弥助爺さんだった。

だが、寂しい心細いと思う心はいつも胸一杯だった。せつなくてせつなくて、時には止め度もなく流れ出て来る涙で顔中の皺を全部水溜りにしてしまふことがよくあった。

そんなとき弥助爺さんを慰めてくれるものは世界中に酒より他になかった。呑んでいると外界が浮き浮きと明るいものに見えて、寂しい、心細いと思う心にも連絡が無くなり、従って思い切り、あッはッはッはと大きな笑い声を無理にでも出してみさえすればそんな思いなど煙のように払い除けることが出来るのだった。

呑み度い——それが晩年の弥助爺さんの希望の全部だった。

その日、弥助爺さんは暮れるまで稲荷堂の前で遊んでいる子供達の群を眺めていた。

「出て行け！」今日も亦息子にそう怒鳴られたお爺さんには日のある中から家に帰るのはあまり凶々しいことに思われた。——そんな時にはきまって「凶々しいおいぼれ耄碌だ！」そう言って再び機嫌を悪くするのが爺さんの息子の口癖だったから。今日のように昼飯の一度も抜き、そして暮れるのを待つて悄然として息子の家に帰ることは爺さんの息子に対する自分が凶々しくなくことを得心させる常例の方法でもあり、又今ではそうしなければ爺さん自身の気も済まないことになっているのだった。

日はするすると西の空に迂り落ちた。子供達は明るい晚餐の席の楽しさを思出して家路に散った。何かの競技で子供達が緊張すれば自分も緊張し、何か可笑しいことをして子供達が笑い崩れれば自分も亦一緒になって笑い崩れて暫くうき世を忘れていた弥助爺さんは、子供達に取り残されて自分一人になると急に薄暗がりの中にしよんぼりしやがんでいる自分自身の姿に気付かせられた。そして、それと共に空腹の感じも急に強くなった爺さんは、敵の家に金を借りに行くような進まない気持ちでとぼとぼと息子の家に向って歩いたのだった。

ふと気付くと知合いの居酒屋の前まで来ていた。「さけ、さかな」と書いた大きな提灯が濁っ

た黄色い光を落しながら下にうなだれていた。弥助爺さんはびくりと立ち止まらずにはいられなかった。

「弥助爺さんじゃないな！」暖簾を掻き分けて小さい森を差し出したのは居酒屋の主の老婆だった。

「まあ、寄って行きなさい」

「さあ………」だがそう言ったときには燃え立つ酒の香に誘われて、弥助爺さんはもう其の方へ身体を泳がせていた。

中に客は一人もなかった。

「一合——な、婆さん」そう言うのが爺さんには精一杯だった。後の勘定のことなど考えてみる間もなかった。息もつかずに呑む朱塗りの椀の中の液体が潮の乾くように減って行くと、弥助爺さんの腹の底からは仄かな喜びが湧き出して来て、ぎ、ぐうと歓声を挙げた。

「もう一合！」

しかし返事がなかった。

「婆さん！」

ふいと其の時弥助爺さんはそう言った自分の声が寂しかった。それと共に一銭の金も持たずに酒を呑んだことが急に気になって来た。がっくりと首を垂れた弥助爺さんは酔いのために錯乱しかかった頭で「どうしたものか」と一生懸命に善後策に腐心し出した。

「しッ！しッ」思いがけない所から婆さんの声が聞えた。続いてばだばだと何かを追う慌しい足音が聞えて来た。驚いて振り向いた弥助爺さんの前に、婆さんは奥から一枚の縞の着物をだらり

と提げて出て来た。

「ほんとにわしは鼠のために命が縮まってしまう。悪戯ばかりしくさって——ほら！」そう言つて婆さんの差し出した着物には二銭銅貨大の穴が明いていた。だが、弥助爺さんは苦しい胸の中の工面でそんなことに気を取られてはいられなかつた。しかし、此場合婆さんの歡心を買つて置き度い気持は本能的に弥助爺さんに媚びるような笑顔を作らせて

「鼠なんぞ一匹無しに取つてしまやいいに」

「どうしたら一匹も残さずに捕れるもんじゃろ？ 弥助さん。教えてつかわし。あんたは物識りじゃけん」

「なんでもないことたい」弥助爺さんは、つい調子に乗つて大きくそう言つてしまった。

「教えてつかわさい。その代り、わし今の酒の銭は要らんけ」

「本当かな」弥助警んは飛び上らんばかりに喜んで

「けんど、きょうはわしは呑んで都合が悪いが……」

「酒飲んでると教えられんかな？」

「うん。ちつとやり方がややこしいけ……」後は有邪無邪に言つて

「明日——な」

そう言つて其の日は弥助爺さんは其のまま帰つてしまった。

それから十日以上も経つた或る日の午後、息子の情婦の働いている旅館に使いにやられての帰り途、弥助爺さんは路傍で手振り可笑しくしゃべっている香具師の演説に足を停めて聞いていた。

香具師が何か面白いことを言ったとみえて人集りは一度にどっと笑い崩れた。弥助爺さんもそれに和して何の苦もない人間のようにあは………と笑い崩れた。と、其の時「弥助さん！ 弥助さん！」と誰か自分の腰を突くものがあることに爺さんは気付いた。

——誰だろう！ 今の笑いの蔭をまだ濃く顔に残しながら何の気もなく後を振り返った弥助爺さんは飛び上らんばかりに驚いた。

「なんしあれからうちに来ない？」寺参りにでも行ったらしい、常と違ってこぎッぱりとした服装をした居酒屋の婆さんは、いつもの人の好きそうな笑顔で顔中を皺だらけにしながら

「ゆんべもあんた、大事なお曼陀羅を嚙られたが………」

「忙しかったもんじゃけ………」弥助爺さんはやっとそれだけ言った。

「毎日毎日あんたの来るのを待った。そげん人を焦らすもんじゃない。早よ教えてな」

「うん」何か言い出そうとした弥助爺さんは急に又口をつぐんだ。そして盗むように香具師の前の人集に視線を走らせた。

「ひとが聞いちや悪いんか！」婆さんはしげしげ爺さんの顔を見上げながら声を忍ばせて言った。

「うんにや、それでもねえ」せつなそうに頭を振ってそう言った爺さんは、ちらと決心の跡を淀んだ瞳の中に見せて、そして恐る恐る婆さんの耳に口を寄せて、しんと澄んだ声で

「婆さん！ そんなに鼠が悪戯して困るなら猫飼いなさい」

そして悲しそうに目を閉って、ほっと大きな溜息を衝いてにやりと笑った。

二、霜夜

「もう十二月も末じゃに単衣ひとえものじゃひと目もある」

そう思い思い冬は段々探くなつて行つた。我が家から十丁あまりの紙箱製造所への往復を、寡婦のお作はひと目を避けながら毎日ことごとと走つた。

「こうして置きや………」

寡婦は愚かし気に呟いてそつと微笑んだ。夜は更けて風は死んでいた。が、霜夜の冷たさはひしひしと身に堪えた。見た目を裕にするために、袖口と裾べりとだけに紺の端片れの縫い付けられた縞の単衣が、お作の膝から破れ畳へかけてのた打っていた。

「こうして著とりや誰が見ても裕だ。寒いくらいどげしてでも辛抱出来る」愚かしい微笑が再びじりじりとお作の顔に滲み出た。

眠っていた粹の長吉がむくむくと起き上つてふらふらと歩き出した。

「小便か？」 駆け寄つたお作は背後から抱くようにしてしげしげと仲の顔を覗き込んだ。

「うん」 半分眠つたままぼりぼりと背を搔く手と一しよに合点首を一つして見せた長吉は、やがて背後から母に支えられながら反り身になって通り庭にじゃあじゃあと小便をした。

「あら！ 長吉！ これは、まあ！」

粹の後頭部に印肉の固まったような傷痕を発見すると、お作は躍り上らんばかりに驚いた。

「どうしたんじゃ？ え、誰がしたんじゃ？」

だがヒステリックな声で尋ねる母の間には答えようともせず、長吉はほとんど蒲団の中に、こりこり込んですっぽりと頭から冠ってしまった。

「どうしたんじゃ！ 言ってみい。言ってみと言うに。言わんか——莫迦ばかッ！」

「健の奴が………」突然長吉が泣きじやくりながら言った。

「石……石で……石で」

「まあ、石で？」お作は自分自身が撲ぐられたような衝撃を感じた。そして、抱くにはもう大き過ぎる長吉の身体を抱き上げて、犬のように傷口を甜めてやった。

「畜生！」ふいに長吉がキツと顔を挙げて叫んだ。

「やるぞ！ あしたやるぞ、外道！ 負けるな、あんな奴に」

「莫迦ッ……何言うんじゃ。あんな強い子と……」狼狽して留めたお作の脳裏で、日歩貸しの息子の、長吉と同年だなどは誰が見ても思われない、精悍な軍鶏のような健次の姿が嘲るように喫笑した。

「がまんしろよ」それに引きかえて長吉の脆弱な首筋や萎びた手足などが、お作には目に絡み込んで悲しかった。

「あきらめろ。あきらめが肝心じゃ、世の中のことはなんでも——な」

蒲団の中にもぐり込むと、もう早や長吉はすやすやと深い眠りに落ちていた。それを見るとお作は寂しい笑いに引き入れられずにはいらなかった。

だがそれも、目の前に投げ出されている長吉のか細い右手を見るともなく見ている中には、いつか淡い悲しみの念に変わって行ってしまふのだった。

「日乾大根みたいじゃ」発育の不完全な、見るからに弱そうな長吉の手が、お作にはしみじみそんな風に思われるのだった。

「折角生れた子供が、一人前の人間になるのさえ金次第じゃ」完全な一人の男になれるのだろうか？ 日陰の草のようにそうなるまでには枯れてしまふのではないだろうか。——我が子に対するそんな観念が、ふいと何処からか湧いて来ると、お作は立っても居てもいられない気がした。と、純白の牛乳壘や赤金の鮮金などがお作の脳裏を乱舞しながら明滅して去った。

「あの人も寿命で死んだんじゃなかった」三年前に鉛毒で死んだ亡夫のことをお作は思い出した。「印刷所の文選なんちゆう商売さえしていなかったら……」するとお作には亡夫の死が非業の横死のように思われてならなかった。

「洋太郎さん」なつかしさを籠めてお作はそつと亡夫の愛称を呼んでみた。すると、亡夫の存在が無くなってから三年間の後までも

『洋太郎』という其の名だけが残っているのが何故かお作には不思議でならないような気がした。そしてお作はぐらぐらと目マイを感じた。

ふとお作は、生活にかまけて亡夫のことなど思い出してみる間もなかった此の半年あまりの自分自身の無関心に気付かせられた。誰を恨むともない口惜しさから、お作は小娘のように泣きじやくり度い気持ちだった。

屋の棟が怪鳥のようにぎぎ、ぎいと鳴いて、齒を喰いしばったお作が折角二晩中かかって縫い付

けた袖口と裾べりとの裏地をべりべりと引き剥く音に和した。

「なんでわしがこんなことまでして世間様に気兼ねせねばならんのじゃ。こんなもの温くもないのに——こんなもの——こんなもの」

戸外では硝子を張ったような霜空に、無数の星屑が寒む寒むと冴えていた。

底本.. 「日本プロレタリア文学集・10」新日本出版社

1985（昭和62）年11月25日 初版

初出.. 「文芸戦線」

1926（大正15）年8月号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2012（平成24）年4月23日